

市川司幸

廊下がしんと冷えていた。素足のかかるとに冷たさが沁み入るようであった。靴下を履かずに寝るのはやめにしてようと友悟は思った。

二月にもなると、天気予報で日本海側や北海道の豪雪が報じられることも特別なことではなくなってきた。今朝もニュースでは屋根の雪下ろしをしようとして押しつぶされた老人が取り上げられていたが、生まれてからずっと静岡で住んでいる友悟にとつて、これらのニュースは遠い異国のことのように思えてならなかった。

一年を通して比較的温暖な静岡県では滅多に雪が降らない。降るとしたら、裾野や御殿場といった、北部の地域に限られる。沼津で雪が降ったのは、五年も前になるだろうか。ほとんどみぞれのような雪が短時間降ったきりである。

会社に行く車の中から見た富士山は、見事な雪の衣をまとっていた。年が明ける前は日によつて肩のところはただけていたりしたが、もうあんな姿を見せることもないだろうと友悟は思った。今の山は大人びてしゃんとしたように見える。

隣のデスクの井上がまた映画の割引券を持って来た。井上は友悟が知る限りで最も流行りに敏感な人物だった。週に二回ほど、友悟と井上は一緒に昼食をとりに出るのだが、そのたびに井上の持ち物、携帯電話であったりバッグであったり、それらに付属する小物やその他もろもろの道具の何かが新調されていた。

井上は友悟の流行りに無頓着なところを突いて、「若年寄」と呼ぶが、友悟からしてみれば、井上のほうこそ二十六歳にもなつて、十代の若者のように最新の流行を追いかめようとする姿勢が理解できなかった。

互いに会社で最も親しい友人同士であるのに、趣味嗜

好は正反対なのである。友悟は内向きで、井上は外向きと言ふべきか。

「これよお、また知り合いが映画を撮ったんだつてき。割引券、もらつてくれよ」

割引券は実写の恋愛映画のものだった。友悟の聞いたことのない題だった。

「きみの友人はアニメーション映画専門じゃなかったのか？」

「アニメーション映画に多く参加しているだけで、べつに専門つて訳じゃないと思うよ。映画関係者つて言つても、音響担当だから実写もアニメも両方やるんじゃないか？ 詳しいことは知らないけど。まあ、何はともあれ貰つてくれ」

「はいはい、今回も売り上げ貢献担当だよ」

「この前渡した割引券のやつは見に行つたか？」

「アニメのやつ？」

「そうそう」

「見たよ。意外と面白かった」

「あら意外だ。おまえは絶対アニメーション映画は見ない人間だと思つていたのにな」

「親しい同僚の御友人殿の映画なんだ。無下にするわけにもいかないだろう。ただ、無駄にイラストが美しすぎるのが気になったな。何でもかんでもキラキラしていちやあ、肝心な場面での美しさが際立たないと思つけどね」

「最近のアニメは、テレビでも映画でもあんなもんさ」

俺はああいふキラキラしたアニメのほうが好きだけだなやっぱり佐びやら寂びやらがあつたほうがいいか、若年寄様」

「その呼び方はいい加減やめてもらいたいね」

井上は笑いながら、押し付けるように割引券を友悟に

渡した。

彼の笑い方はからからと、湿ったところがなくて、友悟は妙に憎めなかった。笑い方だけではない。井上は、諸々の仕事に、子どもっぽい無邪気な隠し包丁を忍ばせていた。それはほんの些細な仕事で、友悟も容易にすることができるとは、井上の場合、それを平然と、しかもこつそりと忍ばせるので友悟はたびたび驚くのだ。課長との付き合いが良いのも、おそらくは彼のこうした些細な仕事によるものかもしれない。井上は会社でも出世頭だった。

「話は変わるけど、熱帯魚を飼い始めたんだよ」

「熱帯魚？」

「そう、熱帯魚。でも、あれだよ、アロワナとかそういう大きいのがなくて、水槽で飼えるくらいの、小っちゃいの。ネオンテトラって言って、形はメダカそっくりなんだけど、青とオレンジで、綺麗なんだ」

友悟は、小学生の頃に飼っていた出目金のことを思い出した。沼津の花火大会に出ている、金魚すくいの屋台で手に入れたものだった。

ちよど捨てようかと思っていた、あまりに大きい壺に水を張って、そこで飼ったのだった。花火大会の一年前に死んだ祖父の家から運び出された壺で、もともと何を入れていたのかわからないほど大きいものだった。

二か月ほど出目金は生きた。家族旅行で四日間の北海道旅行に出ている間の餌を忘れて、四匹ほどいた出目金は悉く息絶えたのだった。

「熱帯魚って、金魚とかメダカ飼うよりも、水質やら温度やらが厳しんだろ？」

友悟が尋ねた。

「ああ、けっこう難しいよ。いろいろ買わなくちゃいけ

なかったが、でもまあ、犬や猫みたいに構ってやる必要もないし、時々眺めているだけでも楽しいから、そんなに大変だとは思わないからなあ」

そういうもんだね、と友悟は言った。

昼休みも、あと十分になった。友悟の周りも、だんだんと人が戻ってきたようだった。

「おまえも熱帯魚飼って見たらどうだ？」

友悟はぼうっとして、聞き損ねた。慌てて顔を向けた。

「熱帯魚、おまえも飼ってみないか？ 彼女もいないんだし、ひとり家で住んでいるんじゃないだろうか？ 犬や猫はおまえの性に合わないかもしれないけどさ、魚だったら物も言わないし、色が綺麗で案外良いもんだよ」

井上は、友悟が結良と同棲していることを知らない。

「俺が熱帯魚ねえ。全然想像がつかないけどね、俺が熱帯魚飼ってるのは」

「今日仕事終わったら、熱帯魚見に行かないか。別にその場で買わなくてもいいからさ、見るだけでも楽しいよ。小さい水族館みたいで、三島にあるんだ、熱帯魚ショップ」

仕事が終わって、一度家に帰ってから、井上の車で熱帯魚ショップへ向かった。県道一四五線のすぐそばの店だった。

井上が「小さい水族館みたい」だと言ったわけが、友悟にはすぐ理解ができた。一商店ほどの広さの店内は、足元から天井まで、ガラスの水槽で埋め尽くされていた。

遠目から見ると水槽の中には様々な色の紙吹雪がちらちらと見えたが、その細かな紙一つ一つが、色とりどりの熱帯魚なのだった。大水槽に泳ぐ魚を眺める水族館とはまた異なっていた、細工のような美しさに思わ

ず友悟は息を呑んだ。

「どうだい、けっこう綺麗だろ？」

井上は友悟の先を歩きながら、水槽の魚を指さして「これはコリドラス」「これはベタ」と名前を言いながら、一つずつ簡単な説明をしていた。友悟は井上の講釈を聴きながら、まるで星座を見るかのように、魚たちの透明なヒレが動く様子や、針で突いた穴のような口を、パクパクさせる様子に見入っていた。

「これだ」

井上はある水槽の前で立ち止まった。水色の体に、赤い色の線が入っている魚の水槽だった。

「これが俺の飼っているネオンテトラ。これを十匹くらい水槽で飼ってるんだ」

「これがネオンテトラなのね」

井上が会社で言っていたように、姿かたちはメダカそっくりだった。色がメダカよりも数段鮮やかで、眩しかった。メダカに絵の具を飲ませたらこのようになりそうだ、と友悟は言いかけたがやめた。

友悟よりも、すでにネオンテトラを飼っている井上のほうが水槽の中を見続けていた。井上の隣にいなながらも、友悟の視線はネオンテトラとは別の場所に向かっていた。

水槽と水槽の間から、一つ向こうの列に周りとは一回り大きな異なる水槽があるのに気づいた。まわってみると、それは横長の大きな水槽で、中には黄色い巨大な魚が横たわっていた。店を満たしている細かな熱帯魚たちと比べて、その姿は異様だった。

後から付いてきた井上が、

「ああ、これはアロワナだね」と言った。

「こんなに大きい魚も売ってるんだね。飼う人がいるのかね」

「こういう魚はな、あれだ。金持ちとか、裏社会の人間とかが、風呂場の壁に水槽を嵌めて、ワイングラスをこう揺らしながら眺めるんだよ」

井上はマフィア映画に出てくる太った俳優のように、ワインを飲む仕草をした。

黄色いアロワナは、他の水槽の、びよんびよん動き回る小魚たちとは異なり、水槽の同じ位置でほとんど止まったままだった。標本なのかとも思ったが、ヒレが微かに動いている。

「こういう大きな魚は、小さい水槽で飼っても死なないかね。魚はストレスに弱いつてよく言うじやないか」

「どうだね。俺は魚じゃないから何とも言えないが、アロワナはそんなに動き回ろうとか、自由に泳ぎたいとか思わないんじゃないか？ すぐ動き回るような魚だったら、こんな小さい店じゃ買えないだろ。それこそ水族館とかね」

友悟は膝を曲げて、アロワナの顔をじっと見つめた。

井上は友悟へ小さく笑ってから、先ほどまでいたネオンテトラの水槽のほうへ戻っていった。

アロワナは一切表情を変えずに水槽の中にいた。友悟が自分の視線をアロワナの眼に向けてみても、アロワナはびくともしなかつた。この魚は自分のことが見えているのだろうか、友悟はそう思った。

黄色い魚は何を思っているのだろう。ほとんど動きもせず、瞳さえ不動にして、ただ水槽の中で時間が経つのを待っているこの魚は、どんなことを考えているのか、友悟には疑問だった。

自分を取り囲む状況に絶望しているようにも見えず、樹木の下でひたすら座して瞑想する僧侶のように、世界のあらゆるものを超越した域に達しているようにも見え

た。

翌日の朝、魚になった結良が浴槽の中でゆつくりと動く様子を眺めているとき、真つ先に友悟の脳裏にアロワナの顔が浮かんだ。

友悟はおとなしくなった青い魚を両手で持ち上げて、あのととき水槽のアロワナを見つめたときのように、魚の顔を見つめた。アロワナと表情は変わらなかった。

友悟の顔を捉えるわけでもなく、ただ自分の視界に入ったものに眼を向けているだけだった。ふいに早朝の風呂場の冷気を感じて、友悟の腕にびっしりと鳥肌が立った。

魚から人間に戻った結良を、友悟はいつものように二階の寝室に運んだ。

毛布をかぶせて、寝室から出ようとした。友悟は振り返って、すっかり眠りについた結良の顔を眺めた。結良のすぐそばに寄った。結良は深く瞼を下ろしていた。

「何を思っているの、結良」

友悟が小さく尋ねたが、結良は何も答えなかった。

友悟はふと、最近になって結良が魚になる頻度が増えているように感じた。いちいち魚になった回数を記録しているわけではないから、ただの勘違いかもしれないなかつた。ただ、何となくそう感じるのである。

結良が再び眠りについたあとの洗面所をタオルで拭きながら、どうしてそのように感じるのかを考えた。洗面所の床には満遍なく水が飛び散っていた。友悟はそれを、昨日からタオル掛けにかけたままのタオルで拭いた。

しばらく考えているうちに、そう言えば、と今日が日曜日であることを思い出した。

友悟は何も思わずに結良の後始末をしていたが、今日

は土曜日ではなく日曜日だった。友悟はこれが違和感の原因ではないかと思った。結良が魚になるのはたいてい土曜日の朝なのだ。

結良が土曜日の朝に魚になるのは、月曜日から金曜日までに溜めた孤独や不安感が一気に噴き出すからである。結良は意識しているのかそれとも無意識か、平日は魚にならない。もしかしたら、他人の迷惑にならないようにコントロールしているのかもしれない。

そうして心のうちに押し込めた不安を、結良は土曜日の朝、つまり金曜日の夜に帰って友悟の家でひと眠りした翌朝に、魚の形にして吐き出す。日曜日は一切の孤独から解放されて、魚になることはない。

ただ、今週は二日続けて魚になった。よく思い出してみると、先週の日曜日も結良は魚になっていた。気付かなかったのだ。魚になる頻度が増えたように感じたのは、これまでは魚にならなかった日曜日にも、魚になるようになったからだと友悟は合点した。

結良に何かが起きたのだろうか。

二時間後に結良はダイニングのある一階に降りてきた。友悟は結良が朝食を食べ、冷たい水で顔を洗うのを待った。

ダイニングに戻ってきて、朝のテレビ番組を眺めている結良に、友悟は何気ない調子で、

「最近何か悩み事でもある？」

と尋ねた。

「んー？」と結良は友悟のほうを向いた。

「いや、気のせいだったからそれでいいんだけど」

「その話、あとでもいい？」

結良はそう言っただけでテレビのほうを向き直した。

リビングのストーブが「ピー」と音を立てる。灯油が

切れかける合図だった。友悟は家の外にある倉庫に灯油を取りに行った。

部屋に戻ると結良はいなかった。友悟は気付かれた、と思ったが、また時間が経つてから訊けばいいことだった。

テレビでは最近人気だという三島のイタリア料理店が特集されている。店のすぐそばにミシマバイカモの育つ池があり、レポーターはクリームスパゲティを巻きながら池の美しさについて話している。

ミシマバイカモは三島の清流にのみ育つ水草の一種で、春になると白い花が咲く。三島市街を流れる源兵衛側に多く生えていて、小さな清流を素足で進むと藻の細い髪のような葉が指の間をすり抜けていく。

しかし、冬の今はまだ花は咲いていない。カメラが映すバイカモも花がなかった。

「春が待ち遠しいですね」とレポーターは繕うように言ったが、花は咲いていなくとも緑色の葉がゆらゆらと揺らめいているのはそれだけで十分美しかった。

春になったら結良とここで食事をとりたいと友悟は思った。そう思いながらも、いざ春になるとそんなことは忘れてしまつて、季節は過ぎ去っていくのである。秋に喫茶店で梨花から勧められた文教町の銀杏並木も、結局見ることなく冬になってしまった。今から言つても、葉の散り切った枝が通りを覆っているだけだろう。その日は昼食を食べた後で学園通りのCDショップに行った。結良も行きたいと言った。

友悟は結良が音楽を聴いているところを見たことがなかった。どんな曲が好きなのかも知らない。

ピアノを弾けるらしいことは知っていた。友悟と結良が同じ中学校に通っていた時に、合唱コンクールの伴奏

を結良が弾いていた。今でも楽器屋に行くと、店に置いてあるピアノでクラシックの曲を軽く弾いていくことがあった。

「結良ってクラシック以外に音楽聴くの？」

駐車を歩きながら友悟が言った。

「流行りの曲とか？ ドラマとかCMで流れてるような曲はけっこう聴くし。好きなアーティストがいるわけじゃないから、まあ、気になった曲を聴くって感じかな」

「へえ。知らなかった。なんか意外だ」

「もしかして、私クラシックしか聴かないと思ってた？」

友悟が頷くと結良は「私だってJ・POPを聴くんだからね」と言つて笑つた。

友悟が七十年代のアーティストのCDの棚を眺めている間、結良は店の中をぐるぐるとまわりながら、時々目についたものを手に取つたり棚に戻したりした。

友悟がCDの裏を見ているところに、ちょうど結良がやってきて、

「何のCD？」と尋ねた。

「陽水のゴールデンベスト。傑作選みたいな感じ」

「陽水って名前は聞いたことあるけど、曲は聴いたことないかも」

「たぶん一度は聴いたことあると思うけど。少年時代とか。中森明菜の曲も書いてるし」

「もしそれ買うんだしたら、あとで聴かせてよ。聴いてみたい」

「わかった。買ったら車にかけておくよ」

帰りの車の中で、友悟は朝にも話そうと思つた話題を再び取り出した。カーオーディオからは買ったばかりの陽水が流れる。

「結良、最近何かあった？」

「どうしてそんなことを訊くの？」

「正直に言つてしまつとね、先週くらいから結良が魚になる回数が増えてるんだよ。今まで結良が魚になるのって、だいたい土曜日の朝だけだったんだけど、先週とそれから今日も魚になってるんだ。結良って不安とか心配事があると変身するようになるでしょ？ だから、何かあったのかなって思つたんだよ」

結良はうつすらと顔をうつむいて、それから窓の外へ顔を向けたが、車の中では誤魔化しが効かないと思つたようで、

「先月くらいから、同じ人のところに泊まっているんだけどね」

と息を吐いた。

「その人、優しく良い人なんだけれど、私以外の女人も泊めているの。恋人とかじゃなくて、私みたいにお金を受け取つて寝てる人なんだけれどね。今までは私、火曜日と水曜日はその人のところで泊まつて、私のために時間を割いてくれていたんだけど、この頃はその新しい女の人が好きみたいで、私のことをそっちのけにしてその女のひとと一緒にいるの。私不安になつちやつて。捨てられちゃつたのかなあ、飽きられちゃつたのかなあつてね。嫉妬なのかもしれない。それで先週の水曜日に、その男の人のところに行つて、抱いてつて言つたの。もししたら、『もう君はいいんだ』って。それだけ。その後ドアの奥から、別の女の人の声が出た。その次の日も訪ねただけで、今度は鍵すら開けてくれなかった」

結良の眼からぼろぼろと涙がこぼれた。

「ねえ友悟、私ってそんなだめな女なのかなあ。メイクだつてちゃんとしてるし、服だつてけっこう頑張つてるんだけど、まだ駄目なのかなあ。その男の人、ベッドに

入るたびに私のこと可愛いつて言つてキスしてくれるんだけど、なんかもう、よくわからない。もちろんね、私もあの女の人も、恋人でもなんでもないから関係が冷めることもあるつてわかつてるんだよ。でも、なんか、友悟もいつか私のことを嫌いになつて身捨てられちゃうんじゃないかなつて思つて、こわくなる」

「結良のことを見捨てるわけじゃないでしょ。小学校の頃から友達なんだから」

「ありがとう。でもね、信じられないの」

信号で車が止まり、背中を丸めて小さくなつて結良の後ろに雪を被つた富士山が現れた。見事な雪の衣だった。その美しさの一方で、友悟の隣で心を揺らす女の姿は、あまりにも惨めで哀れだった。子どもがぶたれたあのように、しゃくつて泣いた。

家に帰つて、すぐにココアを入れた。湯気が立つカップを、友悟は結良と一緒に飲んだ。結良をひとりにしたら、何か悪いことが起こるのではないかとという予感があった。二階の寢室に戻ろうとする結良を、色々な口実で友悟は引き留めた。

夕食をとつた。友悟はテレビをつけて、わけもわからないバラエティー番組を、わざとらしく大声を出して笑つて見せた。結良に気付かれないように、横目で表情を見た。結良は口元に手を当てて笑つていた。友悟は少し安心した。

結良が風呂に浸かっている間、友悟はテレビを消して、結良をどうするべきかと考えた。

結良は今、自分のさみしさを埋めるために知らない男の元で体を預けているが、最近の結良の様子を見る限り、却つてさみしさを助長している可能性があるようだった。それだったら、いつそのこと平日も土日も問わず、自分

の元に置いておいたほうがいいのではないか。彼女を家の中に置いてしまえば、何も思い悩むことはないのかもしれない。

ただ、今回の現象は、一過性のものに過ぎないのかも知れないとも友悟は思った。

結良が魚になる頻度が増えたというのは、つい最近の現象で、それに比べたら男のもとで夜を明かすことによつて魚にならなくなったということのほうが、はるかに信頼できるものではないか。

窓の外で雨が降っている。予報にはなかった雨だった。友悟は雨に気付かされたように、閉め忘れていた窓のシャッターを下ろした。シャッターを下ろしても、雨音は聞こえてきた。ガラス窓も締め切つてしまつて雨の音をかき消してしまうのはもつたないような気がして、窓は開けたままにした。

友悟の中で、結良の習慣を終わらせるか、そのままにしておくかという選択肢に加えて、新しい何かが生まれそうな気がした。しかしそれは、実を結ぶ前に阻まれた。

風呂場のほうから、水の飛び散る音——まるで魚がヒレを叩きつけたときのような——がしたからである。

友悟はまだ中身の入つていたコーヒー・カップを置いて、風呂場に駆けだした。

風呂場の戸を開けたとき、結良の体は既に魚の形に変わつていた。浴槽の蓋が半分だけ開いていて、そこからあの青い魚類の顔が見えた。友悟は蓋を持ち上げて、魚の全体を見た。

結良が眠りにつく前に魚になるのは、これまでになかった。友悟は思わず魚を抱きかかえて浴槽から出したが、すぐにその行動が何も意味を持たないことに気がついた。魚は浴槽に戻されると、いつそう暴れた。ヒ

レで弾かれた湯が、友悟の顔にかかった。

友悟は魚が暴れるのを、隣で眺め続けた。友悟の寝巻はすぐに湯で濡れた。それでも友悟は、浴槽に肘を置いて、魚の静まるのを待ち続けた。他にとるべき処置も思ひ浮かばなかった。

雨脚が強まった。風呂場のガラス窓に雨が叩きつけている。無数のノックが降り注いでいるようにも聞こえる。やがて魚は落ち着きを取り戻して、体は結良のものに戻つていった。静けさの中で雨の音は際立つて、いきなり音が大きくなったようにも感じる。

湯舟の中で、結良は眠りの呼吸をして、そのたびにんだらかな裸の胸がゆつくりとふくらんだ。友悟は初めて結良の体に性的なものを感じた。友悟はいつものように結良を起こすことをせずに、結良が呼吸する様子を眺めていた。雨の音が浴槽に響く。

催眠術にかかっているときのように、友悟はほとんど意識を奪われたように結良を見ていた。結良が突然目を覚まして、上半身を起こしたときも、友悟の意識はここにはなく、結良の皮膚の奥を彷徨つていた。

「友悟？」

結良に声をかけられて、友悟は我に返つた。

「結良、起きたの？」

「友悟、どうしてここにいるの？」

結良は友悟の衣服がびしょ濡れになっているのに気づいた。それから辺りを見回して、「もしかして魚になつたの？」

「うん。風呂場から音がしたから見に行つたら、結良が魚になつて、それでずっとここで見ていたんだ」

「お風呂に入つてるときに魚になつていたの？」

「そう。眠つてるときと同じ、青い魚になつていたよ」

友悟は結良の目が、普段魚になったあとの眠気に包まれた目ではなくて、完全に目を覚ました人間の目になっているのがわかった。

「魚になるまでのことを覚えてる？」

「ううん、何も覚えてない。湯舟に浸かったときまでのことは覚えてるけど、そこから先は全然……」

すこし間を置いて、「悪い夢を見ていたような気がする」と結良はつぶやいた。

「明日、病院に行こう」友悟が言う。「え？」と結良。

「病院に行こう。精神科のある病院。そこで診察をしてもらって、不安を抑えるための薬を貰って来よう。結良が魚になる頻度が増えている理由は僕にはまだよくわかってないけど、何かが起きてるはずなんだ。病院に行つて、その理由を調べてもらおう」

「でも、頻度が増えているのは秋元さんに冷たくされたからで、もう秋元さんのところに行かなければいいことだと思っし……」

「秋元さん？」

「あ、えっと、車の中で話した、先月からお世話になっている男の人。あの人に関わらなければきつと不安になることもないと思っし、たぶん原因は私の嫉妬から来てると思っし……」

「でも、以前だつてこういうことはあつたじゃないか。誰々に冷たくされたとか、見捨てられたとか。でも今回みたいに魚になる回数が増えたり、お風呂に入つてるときに魚になったりすることはなかった。それとは別に何か原因があると思っしんだ」

「でも、病院は行きたくない！」

「そんなこと言つたつて……」

「病院だけは、いや。病院に行つて診てもらつたつて、

何にも変わらない。薬を貰つたつて、何にもない」

「そんなのわからないよ」

「ううん、私はわかるよ。ずっと前に、私が初めて魚になったときに病院に行つたけれど、何も変わらなかつた。男の人とセックスして気持ちを紛らわせようとするようになったのも、病院に行つた意味が何にもなかつたから。だから自分で方法を探したの」

「でも、それも効果があるかわからないじゃないか。それで今、こうなつてゐるわけだし」

「私は行かないからね」

結良の目が、抗議を示した。以前友悟に見せた、あの抗議の目だつた。

結良は浴槽を出て、ひとりで体を拭き、服を着た。友悟を置いて寝室へと向かう結良を、友悟は引き留めようとした。手を伸ばして結良の手首をつかもうとしたが、届かなかつた。

結良は寝室に鍵をかけ、友悟はドアの前で残された。ノックをして結良を呼んだが、反応はなかつた。耳を澄ませると、物音が聞こえた。友悟は諦めてリビングに戻つた。

コーヒーを飲む友悟の手が細かく震えた。結良がそこまで抵抗を見せることがこれまでにあつただろうか。以前友悟に抗議の目を見せたときよりも、結良の心の揺れ方は激しかった。あの抗議は、どこに向けられた抗議だつたのだろう。友悟はすぐに断定することができなかった。

その晩、友悟と結良が顔を合わせることはなかつた。

結良は友悟がいる部屋を避けていたし、友悟も、あの状態の結良に接触するのは得策ではないように思えた。

翌朝、友悟は普段より早く起床した。結良がまた魚に

なるのではないかと思つたからである。浴槽に水を張り、それからコーヒーを淹れて時が来るのを待つた。

結良は起きてこなかつた。もう九時になる。二階から音も聞こえてこない。

結良の精神状態がどうなつてゐるにしろ、普段なら起きてゐる時刻だつた。友悟は結良を起こそうと寝室に行つた。

寝室はもぬけの殻だつた。

ベッドの上に書置きがあつた。結良の流れるような文字で

『昨晚はごめんなさい。友悟が私を気遣つてくれたのに、あんな態度をとつてしまったことを後悔しています。ごめんなさい。でも、病院だけは行きたくないんです。このことは、友悟にわかつてほしいです。私のことなので、私自身で解決しなければいけないことだと思ひます。すこし、友悟の家を離れます。ごめんなさい』とあつた。

結良は友悟に気づかれないうち、夜のうちに家を出ていったらしい。

もう間に合わないことはわかつていた。しかし友悟は、家の外に出て、結良がいなくなるかと周りを見渡した。結良に何もできなかった自分を上書きするために、わざとらしく顔を左右に向けた。

昨夜の雨は雪になっていた。沼津には久しく降つていなかった、完全な雪だつた。みぞれなどではない。しかし勢いは弱く、粒も小粒で、雪はアスファルト道路に着地してすぐに水に溶けていった。

家の前の通りからは、富士山は見えない。